
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 魔法という名の男(仮) ~

ゾンビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS（魔法という名の男）
仮）

【Nコード】

N7748X

【作者名】

ゾンビー

【あらすじ】

時空管理局に、一人の男がいた。その名もマジギ…階級は大佐で、周りからは『魔法』と呼ばれていた。彼と、なのは達の道が交わる時物語は絡み合っていく……

プロローグ（前書き）

いきなり突拍子もないところから始めます。ではでは

プロローグ

「時空管理局本局へ通達、我が隊は未確認機械と交戦中。未確認機アンチマギックフィールドはAMFを装備しており、戦況は不利：負傷者多数。至急応援を頼む。」

本局に連絡を入れている男の名をマギ・アシユナルという。

彼は一等空佐、今回の任務では体調を引き受けた男だ。

「畜生。」

ボール型の未確認機と、蜘蛛型の未確認機か…

「俺の後ろまで後退、いいな？全員だ」

この部隊は寄せ集めにしてはいいところで、統制がなかなか取れない。

それも、我ら管理局のエース・オブ・エースとゆかいな仲間がいるせいでもある。

彼女達…高町なのは空尉と、ヴィータ空尉はなまじ実力があり、AMFを突破できる攻撃を放つことができるので、前へ前へ出ようとする。

「おいこら、その白いのと、赤いちっこいのがね。」

「でも、私たちが下がると…」

俺はため息をつく。

「上官命令だ。」

高町なのははどうも、これをやらなければ自分を必要としてくれないと思ひ込んでいる節があるなあ。

「じゃあ最後に、スターライト…あれ？」

ピンクの光線は、チャージ中に掻き消えてしまう。

「え？」

薙ぎ払われるはずだった蜘蛛型の敵は、攻撃が失敗したことによって、なのはに向かっっていく。

「っち、しゃあねえ。リミッター限定解除。ブースト使用。」

リミッターを自己解除した上に、魔力をオーバードライブさせるために造られたデバイスの機能を使い、底上げする。

「なのはー」

ヴィータの叫び声が聞こえる。

「俺の目の前で、もう誰も死なせはしない。」

蜘蛛の攻撃を俺の身一つで受ける。

それでも俺の体を貫通した攻撃がなのはに当たり、後ろから悲鳴が聞こえる。

「我、光の導き手なりて、眼前の患者を滅ぼさん。」

血を吐きながら詠唱する。

「グランド…ファイナーレ…」

大団円とはいいいがたいが、俺が未確認機をすべて破壊して戦闘は終了になった。

「なのは…」

近づいてきた、ヴィータに俺はゆっくり近づくと、にっこり笑う。「だから、下がれといったんだ。」

血を吐きながら淡々という俺に、ヴィータは顔を青くするだけだった。

「リカバリー」

30秒の短い魔法だが、ある程度は体力を回復してくれる。

むろん今は自分にかけてはいないが…

「これで、病院までは持つ。」

俺は地球から持ってきた煙草に火をつけると、さっきの戦闘で、せりあがった岩に腰掛ける。

「…なんで…?」

「いいから、さっさと行け」

俺は転移していった二人を見つめながら、軽く通信回線を開く。

「全部隊員に告げる。本部に帰投せよ。」

それだけ言うと、煙草を口にくわえ、煙と共にふーとため息をつく。

「最高の人生だったね。」

この日、時空管理局でMissing in action…MIA者が出たという通達がなされる。

そのものの名、マギ…アシユナルといった。

1話 エースの目覚め（前書き）

基本的に、酔いながら執筆しているので、誤字脱字が多いです。

あと、酔いがさめた時、酔ってる時に書いた設定をメモルの忘れてたりします。ツツコミはウエルカムなのでどんどんツツコンでくださいね？

ああツツコムってなんかエロくないですか？

1話 エースの目覚め

私は死んだと思っていた。

自分の不注意からスターライトブレイカーを失敗してしまい、敵の攻撃をあたったと思っていた。

それなのになぜ、私は病院のベッドで寝ているのだろう。

「なの…は？」

病室の扉を開けて入ってきたのは、ヴィータちゃんだったの。

「なのはー。」

飛びついてきたヴィータちゃんを受け止めると、私は困惑した表情を浮かべる。

「よかった…本当に良かった。」

何が起こったのかわからず、卓上のデジタルクロックで今日の日をちに確認する。

え？

驚くのも無理はない、あれから…最後の任務から二か月は立っているのだから。

「…ねえヴィータちゃん…私を助けてくれたのって…」

事実を認識し、落ち着くとようやくあの時の状況を思い出し始める。

「もしかして、部隊長さん？」

ヴィータちゃんは少し黙ってしまふ。

「ん？ああアンタらが、今回の任務の補充要因か…俺はこの部隊の隊長、マギってんだよろしく頼む。」

記憶の中の隊長はともまぶしい笑顔でそう言っている。

「まあこの部隊っていつても、今回の任務のために寄せ集めたような混成部隊…よく言えば連携の練度が低い…悪く言えば、統率のとれていないゴミだめだ。」

それは言い過ぎだろうと思うのだけど、それでもかまわず彼は言葉を発する。

「まったく、上の連中もこんな混成部隊を作って、何しようってんだろうな。」

「マギー等空佐。」

私がそう呼ぶと、彼はどこか居心地の悪そうな顔をする。

「マギーでいい、階級で呼ばれんの好きじゃないんだ。通貨呼ばないでお願い。」

涙目で懇願してくる彼は、どう見ても上官には見えなくて、軽く笑ってしまふ。

「ほら、やっぱり堅苦しい顔してるよりか、嗤っているほうが可愛い。」

素面でいう彼の言葉は、どこか偽りのないように聞こえた。

「なのは、マギー隊長は…MIAに認定された。」

任務中の行方不明…しかもMIAに認定されるということは…これ以上の搜索もなし、事実上死んでいるという扱いになる。

「え？…嘘だよな？ヴィータちゃん。」

ヴィータちゃんの顔は暗い…

「ねえ…嘘だと言って…嘘だと言ってよう。」

泣き崩れる私にかけられた言葉はなく、気づいたら面会時間が終わっていた。

夜、お見舞いの品の中に一枚の手紙があるのに気づく。

私はその手紙を手にとって、読み始める。

「私が守った名を知っているかもしれないし、知らないかもしれない誰かへ。私は君という命が守れたことを誇りに思う、ほら誰かを護るって、男の子的に燃える展開だからさ。」

手紙の中でも変わらない彼に、苦笑いを浮かべる。

「君に頼みたいことがある。また私みたいなバカな人間を出さないためにも、管理局の将来を頼みたい。私には、絶対できないことだ

からね？』

これは…遺書？

でもなんで私のところへ来たんだろう。

『ちなみにこの手紙は俺が死に際、転送されるようになってる。

俺の記憶をもとにね？ふふ、道が交わったらまた逢おうじゃないか。何百年先になるかわからないけどね？』

私は手紙を抱きしめながら、眠る。

彼が守ってくれたこの命を無駄にしないためにも、前に進まない
と…

そう心に誓い、管理局への復帰を目指すのであった。

包帯をぐるぐる巻きにされた体を木の杖で支えながら、コテージ
を歩き回る。

「これでも死ねないなんてね？」

まったく俺の体はどんな構造しているんだか…

「それがお前の美点だろ？」

缶ビールが俺の隣に置かれる。

「俺はまだ未成年だぞ？」

「マジ…いいか？ここは地球でもミッドチルダでもない第99管理
外世界だ。」

なるほど飲酒禁止法は働かないと…

こんなバカな人知恵をしてるのは、親友のゲンヤを見る。

「変わったな？ゲンヤ・ナカジマ」

「14歳で大佐になった人間に言われたくないよ。」

ははと、苦笑いをする。

「思わぬところで、娘もできたしね？ほら、かわいいだろ？」

写真を見せられ、俺は顔を引きつらせる。

「あれから3年か？早いな…」

「だな…」

俺は軽くタバコを取り出すと吸い始める。

「ゲンヤ…クイントに注意しといてやれ。上層部がやらかす気満々だからな。来るとしたら一年以内だ。」

「おいおいちよつと待て、どこまで知っているんだ？」
紫煙を吐き出すと、窓の外を見る。

「知っていることまでだよ…スカリエツティと賢人会議がつながっているとかね？」

むしろスカリエツティを生み出したのが賢人会議だったりするのだが、そこは置いておく。

「…マギ…酔っているからとかじゃないだろうな？」

「ああいたってマジだ。上層部は俺となのはを殺そうとしたしな。」

俺は、昔使っていたストレージデバイスを取り出す。

「んじゃまあ宣言だけでも、マギ・ゲシュテンヒルド三等尉、再び陸上警備隊第108部隊に戻ります。」

痛む体を押さえながらデバイスを杖代わりにして立ち上がり、敬礼をする。

「解った副隊長権限で受諾しよう。何時から復隊する？」

「明日からだ。時間はかけてらんないからな。」

「…じゃあ待つてるぜ。」

ゲンヤはそういうと出ていく。

さて…準備でもしますかねえ

とある研究所にて…一人の少女が保管庫で立っていた。

「なあ、あんたが、マギ大佐がつかつとったデバイス？」

「八神 はやてですか、その質問には肯定します。」

堅苦しい話し方が聞こえてくる。

そこで保管されていた、指輪が発した声だった。

「マギ大佐がなくなっている可能性がある、あれは嘘やな？」

「肯定。マスターは殺しても死にません。」

少女は少し苦笑いを浮かべる。

自分のデバイスにそこまで言われるマスターって思っているに

違いない。

「ええの？うちに言うてしまつて。」

『肯定。管理局上層部にバレなければ教えてもよいと、マスターに言われましたので。』

彼が何を考えているかわからなくなった少女は、首をかしげる。

「彼はもう管理局に戻つてこらへんの？」

『否定、マスターは帰ってきます。必ず。』

AIの発する言葉なのにその発言はどこかしっかりとされていて、まるで実現するかのように思える。

『私をゲンヤ・ナカジマのところにいるゲシュテンビルド三等尉の

下へ連れて行つてもらへませんか？八神。』

「…その人が、彼の手掛かりを知つとると？」

指輪はそれ以上語らない。

少女はため息をつくと、持ち出し許可をもらいその指輪を持ち帰る。

彼の計算外のところで世界は回っていく…

1話 エースの目覚め（後書き）

駄文を読んでくれてありがとうございます。

今回は二つに分けてたものをくつつけてしまったので違和感があります（苦笑）

にぎり酒初めて飲んだけど結構つまつまだなあ

日本酒は富山の

マギっだめだこいつ…ほんと、昼間から今まで飲むとか頭おかしいんじゃないか？」

2話 大佐の仕事もなくなって暇だし108部隊に凸してくる(本音)(前書き)

冷静に見ると、ひでえw

2話 大佐の仕事もなくなって暇だし108部隊に凸してくる(本音)

包帯だらけの男は、髪色と目の色を変えメガネをかけることで、マギ大佐ではなくマギ三等尉となる。

「陸上警備隊第108部隊に復隊しました、マギ・ゲシュテンヒルド三等尉です。」

敬礼をする。

「隊長のコール・デュノスです。あなたの復隊を歓迎しましょう。」
握手をし、自分にあてがわれた寄宿舍へと入っていく。

寄宿舍は二人一組の部屋になっており、相部屋の人間は大方訓練にでも行っているのだろう。

俺は荷物をベットのの上に放り投げると、ストレージデバイスを展開する。

開けっ放しの扉をノックする音が聞こえた。

「おう、お前が来ると連絡があつてな。」

扉の外を見ると、そこにはゲンヤがいた。

「隊長にならないのが、不思議なゲンヤさんじゃないですか。」

「おい。」

俺たちはただ笑いあう。

それは、ゲシュテンヒルドとしての欠落した2年間を取り戻すための行為に思えた。

「体の調子は？」

「十全といい難いが、三等尉ぐらいと考えるなら、十全に動けるよ。」

「そうだと思いつき、にやりと笑う。」

「訓練場に連れて行ってくれないか？」

訓練場に来た俺は、啞然とする。

陸の安全を守るための訓練施設が、空より充実するどころか劣化

しているのだ。

「……」
「驚いただろ？これが陸の現状さ。訓練校のほうで設備が整っている。」

レジアスのおっさんは、いったい何を考えてやがる。

末端がこんな状態なのに、新兵器の開発なんて……

「全員集合。」

ゲンヤは訓練している108部隊の全員を招集する。

「訓練中すまない。今日、108部隊に復隊する人物の紹介をしたと思う。」

俺は一步前が出る。

「マギです。階級関係なしにマギと呼んでください。」

「……あんたがナカジマー尉が話していた天才か。」

とげとげしい声が聞こえる。

「ふん、俺と模擬選しる。」

止めようとしなないゲンヤを見て、内心舌打ちをする。

「いいですよ？10分ください体をほぐします。」

俺はゲンヤに軽く耳打ちすると、ゲンヤは嫌な笑顔を浮かべる。

10分後模擬戦場に部隊の全員が集まる。

中央のフィールドには俺と、喧嘩を吹っかけてきたやつが立っていた。

「マギ」

投げてよこされたのは、カードの形をしたかつてインテリジェントデバイスが手に入る前：杖型のストレージデバイスとこのストレージデバイスの組み合わせで戦っていたのだ。

ちなみに、杖型は俺が持っていたが、こいつはゲンヤに預けていた。

「さあてはじめようか。」

俺はカードを右手に持ち、左手で展開した杖型のストレージデバイスを握る。

「でははじめ。」

俺は軽く走る。

いきなり魔法が飛んでくるが、俺はいきなり相手の死角に入り込む。

「ほれ一発目」

俺はバットののようにデバイスをふるうと、相手の腹に命中する。

「よく見ておいた方がいい。」

遠くでゲンヤがそうつぶやいたのが聞こえる。

「かつて108部隊最強と呼ばれた陸戦魔導師の戦い方だ。」

いやあ照れるねえ。

相対している男は、不利と感じたのだろう、空へと逃げる。

「ほう…空戦の才があったか…」

ちなみに俺も飛べるのだが、今回は飛ばない。

「セットアップ」

俺は先ほどゲンヤから受け取ったデバイスを起動させる。

展開されたデバイスは銃の形をしている。

「シヨット」

紅の魔法弾が放たれ、空にいた男を打ち落とす。

「俺に苦手な間合いは存在しない。」

俺は空中に足場を出現させ、駆けると落ちてきた男に追い打ちをかけるようにかかと落としを入れる。

「グツ」

短い悲鳴が聞こえ、俺はにやりとする。

「ふう。」

男の隣に立つと、杖を突きつけずに見下ろす。

「さあ、まだいけるだろ？」

それは挑発ではない…ただ相手が戻りの俺をなめて本気を出していないのを見抜いているから言えることなのだ。

「ふっ、後悔すんじゃねえぞ。」

俺は蹴飛ばされ、気づくと足が凍っている。

魔力変換資質：氷結だと。

「はっ、おもしろいなあ。」

まったく108部隊は何でこんなに面白い部隊になってんだ？

飛んでくるビーム状の魔力圧縮体を杖で打ち返す。

「っち」

魔力の圧縮体ということは、魔力変換できるということで、俺のデバイスが凍る。

あわてて杖を手放し、銃を構える。

飛んでくる魔力弾：おそらくデバイスシューターだろう、砲撃魔法を使ったとき同時に打ち出し手やがったな。

「マルチショット！！」

俺はトリガーを引き次々と魔力弾を打ち落としていく。

「っち……」

銃型デバイスは単純に魔力弾による射撃の身に特化したデバイスなのだ。

杖型デバイスで、先ほどまでの無茶な動きを補助していたに過ぎない。

杖型デバイスを失った今、射撃のみで、いろいろと不都合が出てくる。

「畜生、こんなことなら3つ目だしとくべきだった！！」

俺は地面に魔力弾を打ちながら、その反動で空へと舞う。

魔力変換資質もレアスキルもないそして使える魔法は…ショットのみ…いいじゃねえか。

「awesomest!!（最高中の最高!!）」

二人の攻撃が、同時に交差し、同時に二人へと吸い込まれていく。男は吹き飛ばされ、マギは落下していった。

最初に立ちあがったのはマギだった。

「ってえ……」

氷に埋もれていた自分の杖を魔力弾で削りだすと、軽く振り回す。「傷とかないな…よし。」

俺は、軽く杖を構えると、倒れている相手に治癒魔法をかける。

「OK、彼をだれか医務室に運んでおいてね。」

俺はデバイスを待機状態に戻すと、軽く痛む背中をさする。

「なまったんじゃないか？」

そう、ゲンヤに声をかけられ、俺はゲンヤをにらむ

「怪我人に模擬選なんかやらすなよ……」

俺のつぶやきは聞き入れられたのか、聞き入れられなかったのかわからないが、ゲンヤは笑っているだけだった。

部屋に帰り、包帯を巻き替えていると、模擬選で戦った男が入ってくる。

「ふむ…同室だったか。」

手早く巻き替えると、俺は彼に向かって手を差し出す。

「よろしく頼む。」

「っへ…アルロフ・ナーステルだ。階級は一等陸曹だ。」

握り返してくる手は、とても暖かった。

「…包帯を巻き替えていたみたいだが、さっきの模擬戦で？」

俺は首を横に振る。

「いや、ただここに来る前から怪我人だったただけだ。気にすんな。」

俺はストレージデバイスを展開し、分解する。

「ん？なんでいきなり分解？」

「ああこいつ、見た目は一般に配られてるストレージと同じだけど、作ったのは『マスターオブデバイス』と呼ばれてる違法デバイス製作者の作品なんだ。」

ただ魔法の発動速度を速めて、固くしたただけなんだが…

「へえ、そんなものをよく整備できるな。」

「まあな、4年前は彼の下で、デバイスをいじってたし。」

俺は軽く欠伸をする。

「さてと、俺はそろそろ寝るな。」

「おう、お休み。」

これがアルロフとマギの出会いだったりする。

2話 大佐の仕事もなくなって暇だし108部隊に凸してくる(本音)(後書き)

本編、機動六課設立で人が集まってくるところまでは駆け足。

全部やっているときりがないので、あまりだらだらしすぎると、AG

Eのコーナー崩壊みたく要領を得ない話しをだらだらとする羽目になるのでw

3話 空から来た友人（前書き）

あのフラグを立てようと、原作からあの人引っ張ってきてます。
原作順守しないつもりなので…いいよね？

3話 空から来た友人

新暦68年某日、我らが108に本局の魔導師が研修に来るらしい、

空にはエースばかりが集まるが、捜査能力は陸のほうが上だからだ。

「へえ誰が来るんだろうね？」

正直本局というか空の連中を陸は歓迎しないふしがある。

空と陸の対立が原因なのだろうけど。

「これはどうかと思うよ。」

ゲンヤは出張の為にいないが、出迎えに来ているのが俺とアルだけだったりする。

「マジ、だらけるのはいいが客人が来たらしつかりしろよ。」

諭してくるアルを見て、俺はため息をつく。

「おいおい、俺が身内以外でだらけたことあったか？」

「……」

約一年間、俺の動きを思い返しているのだろう。

「…あるな、129との合同演習とか、陸の本局に出向した時とか。」

「本部では何もしてないぞ？」

129部隊は懐かしの集団演習だからちょっとはしゃいだけだし、本部では俺にひはないはずだ。

「じゃかましい、108にむさつ苦しい男のオペレーターしかいないからって、本部で女性口説いてオペレーターとして転属させたくせに。」

頭を殴られ、俺は頭を押さえる。

「俺は悪くねえ、あんなところに口説ける女性職員を配置している管理局がわる……」

蹴飛ばされて俺は宙を舞う。

「はは、母さん…僕…空を飛んでいるよ？」

「ん？」

俺が飛んでいく直線上に人が歩いてくる。

「あらよつと。」

俺はその人の目の前に降り立つと、にっこりと笑う。

「ティーダ・ランスター一等空尉ですね？あわただしくて済みません。マジです。階級は秘密ですがよろしいですよ？いや聞かれたとしても答えませんが。」

頭を押さえながらアルがこちらに歩いてくる。

「ティーダ一尉部隊の駐屯地まで案内します。」

さつさとティーダを連れてアルは車へと向かう。

俺は動こうとしたが、体が動かない。

「おいおい、マジかよ。」

ガツチガチにバインドを駆けられていたのだ。

車のエンジン音が聞こえ、俺はため息をつく。

「ここから駐屯地まで車で40分かかるのに徒歩で帰れと？」

まあいいんだけどね？

俺は車をもくもくと車を運転する。

ちなみに先ほど、自己紹介はすんでいる。

「アルロフ軍曹、彼をおいてきてもよかったですか？」

「ええ、いつものことなので問題ありません。」

ルームミラーに映るティーダ一等尉は軽く苦笑いを浮かべる。

「それにしてもマジですか…お亡くなりになられたマジ少将のことを思い出しますね。」

マジ少将？

「生きていた当時は、やり手の大佐がいたんですよ。」

二階級特進で過去形ということは、死んだのか。

「さぞかし、破天荒だったみたいですね？」

「ええ、大佐にしては任務を請け負って、制圧戦に参加したりいろ

いろとおかしかった人でした。周りからは『魔法』と呼ばれていて、大佐を慕っている人は同期でもかなりの人数がいました。」
その顔はとても楽しそうだった。

まるで、あこがれの人物を語るみたいに…。

「そんなすごい大佐が本局におられたのですか。」

うちの本部なんかは、基本何考えているのかわからない連中ばかりだからなあ。

「うちのマギも見習ってほしいものです。」

「…あの…彼は自分の階級などを呼ばせてはいないのですか？」

ん…ああ。

「初対面でマギとだけしか、挨拶していなかったでしょう？僕らの場合、マギと呼べでしたからね？」

一等尉は少し渋い顔をする。

「本当に、少将にそっくりだ…」

そんなつぶやきも、むなしく空に吸い込まれていった。

ふむ…

「駐屯地に車がないということは…」

「追いついてしまったかあ…流石は俺…」

「マギ？本局から研修に来る人はどうしたの？」

同じ部隊の仲間でミーシャ・ベルヘルトがそういつてくる。

「うむ、俺の相方が俺のことを放置してくるまでこっちに帰ってきたはずなんだが…」

ふむここまで走って12分か…

「まさか、車追い抜いていたとかバカなこと言わないわよね？」

「実は追い抜いてました、テヘペロとかダメかい？ミーシャ。」

ミーシャが頭を押さえる。

「はは、そんなにストレスをためると、せつかくの美人が台無しになるよ？」

「マギ…あなたって人は…」

俺は軽く笑う。

「でもまあ、うちの部隊の女性陣が美人かかわいい子しかいないのは事実として…あいつ遅いなあ。」

「もういいわよ。」

ミーシャはそっぽを向く。

俺は苦笑いをしながら空を見上げると、軽く言葉を紡いだ。

「出会いは、必ず物語の重要な位置づけとなる。それがどんな悲劇だとしてもね?」

だから、見てろよ。

車が到着し、啞然としたティータとアルが下りてくる。

「くつくつく、ようこそティータこの魔境…ぐるばあ…」

アルとミーシャの共同作業だと。

「いって〜、ちよつと遊んだだけじゃんかよう。」

つつか、パンチに魔法のせんなし。

「はは、マギ。」

予想外の人物が、俺の名を呼ぶ。

「なんだい?ティータ?」

「これから一週間だが、よろしくな。」

差し出された手を握り返す。

それをアル達は呆然としながら見ていた。

3話 空から来た友人（後書き）

日産ティードじゃなかったティードはマギのことは知っています。
ちなみに私は自動四輪より自動二輪のほうが好きです。

4話チートの日常(前書き)

サブタイ考えるの面倒になった結果がこれだよ!!!

4話チートの日常

訓練の休憩時間に、ゼリーの栄養食を吸う。

「しかし、マギとアルは本当に陸戦魔導師なのか？」

俺、アル、ティード俺たちは、陸空の垣根を越えて友情をはぐくんでいた。

「ん、まあな。オフアーが多数来ているが、空じゃできない治安維持の仕事が陸でできるしな。マギは？戻るんなら空のほうか…」

おい、アルそれは初耳だぞ。

「ん？空かぁレジアスのおっさんに惚れたからとかなし？」

「…なし!!!!」

俺はため息を吐く。

「俺がいなくなっただけからの4年間で、ここがどう変わり。空の現状を陸から見るともめる。」

一年前から、ゲンヤは各方面を飛び回っている。

彼自身、真実が知りたいのだろう。

「空のほうが気楽でいいぞ？相手を蹴落とすことなくピリピリせずと同じ釜の飯を食えるしな。」

俺の言葉に、ティードは苦笑いをする。

「まるで空にいたような言い方だな。」

「そうか？客観的事実を述べたまでだが…あ、ちなみに俺の夢はデバイスマイスターだ。」

二人が同時に体から力を抜く。

「おいおい、その戦闘能力どこいったし。」

「あははーちなみにそろそろ研修が始まるから、しばらく108を抜けるよ。」

大佐時代の俺の名前ならヘリパイロットと艦船操舵も持っていたのだがなあ。

「執務官試験も受ける予定だから、しばらくは本局かなあ。」

本局行くと、ばれそうだから嫌なんだが。

「え？俺に相談なしとか傷つくわあ。」

ああ、アルにも言っていなかったか。

「まあ夢だしな。執務官資格とつてもこっちに帰ってくるし。お前何のために資格取るんだよって言われたら、取りたいからとるんだよとしかね？」

建前と本音を分ける…それが重要だと思っただけだ。

「さて訓練再開だ。」

とある、管理局の実験施設に、もぐりこんでいた。

「あんま無茶するもんじゃねーな。」

ゲンヤは一人そう愚痴をこぼしながら、つぶやく。

彼にリンカーコアはない…有能な指揮官故にのし上がってきた彼には、質量兵器が禁止された世界で、もぐりこめるはずがなかった。

だが、彼は不可能を可能にしたのだ。

ならば、その姿を見て俺は力を貸すべきだろう。

「力をかそうか？ゲンヤ」

そこに立っている男を見て、ゲンヤは驚きに目を見開く。

「マギ…」

そこに立っていたのは、大佐としてのマギ…二階級特進して少将か…

「おう、マギさんですよ。まっ今の俺は幻想だけだな。」

んじゃ、いつちよやりますか…

「時空転移。」

マギ達は第99管理外世界に転送される。

「いやー危なかったねえ」

「どうして助けた？部隊は？」

困ったような顔をマギは浮かべる。

「さっき言ったけど俺は幻想だ…真実を知りたいか？」

「…ああ。」

「なら約束しろ、クイントとの約束を達成すると!!」

答えは返ってこない…

「…もし約束してくれるなら、俺がすべてを解決する。」
軽く胸ポケットから煙草を取り出す。

ああ、未成年はホルモンバランス的に体に悪いらしいから、吸っちゃだめだぞ

「信じていいんだな？」

「俺を信じる…信じてくれるならば、信じていてくれるならば」

「人間が信じていてくれるなら、俺は人間を裏切らない。」

「いきなりどうした？」

おっと、こっちに思考が漏れてたか。

「くつく、ちよつとな。念話で説教飛ばしてた。」

俺はティードの弾丸をはじきながら、銃型デバイスで応戦する。
今は三人でデスマッチをやっている。

「おっしゃ、でかいのいくぜ。蒼天かけるは蒼き風。曇天飾るは、
黄金の稲妻。」

「やば、ティードプロテクト早く。」うじょうと

俺はにったりと笑う。

「瓦礫の街を彩るは紅蓮の焰。」

「ちよ…不吉な言葉しか紡がれてねえ。」

魔力が胎動して大気を揺らす。

「ラグナロク」

いったいが燃え盛り、楽々とプロテクトを破ってゆく。

「ちよつとまでー」

こんな日常が続けばいいなあ。

まあ…無理だけど。

俺は逃げ惑う二人を見ながら、苦笑いを浮かべるのだった。

4話チートの日常（後書き）

暫くは更新ありません

ストック作ってはいるんですが、日常生活におけるストレスによって飲みすぎ一升瓶を二本などありえない寮を飲んでいるせいで執筆がすすんでいないためです。

今もあとがきに何かいているか理解していなかったりね？

教訓PGに酒とたばこを飲ますな！！

5話マギの休日(前書き)

ぬらりくらりと生きていきます

5話 マギの休日

ふむ… オフシフトか。

「108部隊 オフシフトー」

「…」

珍しくアルがはしゃいでいるが、俺は陸戦魔導師に供給される制服に身を包む。

「ん？ちよつと本部にカチコミ。つうのはつそで、しばらく空に上がる申請書出してくる。」

「ああそんなことも言ってたなあ。」

「またナンパしてくんじゃねえぞ？」

…アルの言葉に、俺は舌打ちする。

「大丈夫、俺にはミーシャがいる。」

「オイコラ、待てや。」

「隊長には、本部行く許可ももらっているからアラート出たら頼むわ。」

「

あるは頭を押さえる。

「まつ、いいけどよ。」

あはは、と苦笑いを浮かべる。

久しぶりに本部に来た俺は受付のお姉さんに軽く愛拶を終えると、ビルの中部にある人事部に顔を出す。

「こんにちは、空に上がる許可もらいに来ましたー。」

人事部のお姉さんが書類を持って笑顔でやってくる。

「マギさんですね？こちらの書類にサインをお願いします、あとこちらにも。」

二枚の書類にサインをかく。

「では、申請を開始しますので、少々お待ちください。」

俺は持ってきていた雑誌を開けると、エースオブエースの記事を

眺める。

「アレから、もう一年か。」

記事には、高町 なのはのインタビューが書かれており、俺に対するメッセージもあった。

「うん、元気で何よりだ。」

同い年だとはいえ、親近感を持つのはお門違いなのだがまあいい。

「やっぱり転属ばかりでしんどいわぁー」

隣に座ったのは茶色の髪の毛、美しいため…御嬢さんだった。

ためきつて犬科なんだぜ？

「ん、貴方も移動ですか？」

無理やる造った標準語の敬語…ふむ違和感があるな。

「執務官試験を受けるために、申請をね？ああ楽な話し方でいいよ。俺は気にしないし。」

「そうなん？じゃ、楽にさせてもらおうわ。」

俺は少し苦笑いをする。

「執務官試験ということは、空戦魔導師の資格も持つとるん？」

「いや、空戦魔導師の資格も一緒に受ける予定。受かったら次はデバースマスターかな。」

「へえ…」

それを聞いて、いいことを聞いたという具合に、彼女は目を光らせる。

「それが終わったらこっちに帰ってくるわけなんだが。」

「そうなん？本局でキャリア組になった方がいいと思うんやけど。」

執務官になると、それ相応の立場が用意される。

本局に席が設けられ、歓迎される。

「地上を変えたくてね？俺の部隊に研修で今空戦魔導師が来ているんだが、そいつと同じ釜の飯食って訓練してるうちに、なんか空と陸の対立がばかばかしく思えてしまって、それを変えようと思うんだ。」

「それが生半可な覚悟でできんということ、わかっているはずや

な？」

少し、冷めたような声が耳に聞こえる。

「生半可なことじゃないから、やるんだろ？」

彼女は俺の微笑みに顔を赤くする。

「アンタも信念を持っているはずだろ？ だったらそれを貫き通せよ。」

俺は微笑むと、受付のお姉さんが俺を呼ぼうとしたので歩いていく。

「まっ、道が交わればまた逢おう。八神 はやて。」

カウンターにいき、次に行かないといけない場所を指定される。

「で？ アンタが俺を呼ぶなんて、意外だなあ。」

指定された場所に行くと、レジアス中将がいた。

「久しぶりだな、レジアス。」

「マジ、貴様が戻ってきたと聞いて驚いたぞ。何の心変わりだ？ っ」と俺は考える。

「最高評議会から命を狙われてね？ 死んだことにしておいた方が、何かと便利だったんだ。」

俺はそつつぶやく。

ちなみにこいつとは大佐時代、陸の戦力増強で一度結託したことがあった。

「クイント…ゼスト隊が殺された。心当たりは当然あるよな？」

「ああ、私が殺したのも同然だ。」

肯定され、俺は一気にやる気をなくす。

「…後悔は…しているのか。面白くねえ。」

「な！！！」

驚くレジアスを笑う。

「アンタなら必要な犠牲とか言っても問題はないだろ？ レジアス…スカリエツティには気をつける？ 裏切るぞ？」

「……それでも、私はやらないといけない。」

わかったとつぶやく。

「話しがそれだけなら行くぞ、久々の休暇を堪能したいんだ。」

「ふふ、変わらないなお前は。」

「少なくとも、変わっちまった誰かさんみたいにはならんわな。」

笑いながら部屋を出ると、俺は煙草に火をつける。

「本当に、変わっちまったよアンタ。」

俺が見上げてたのはいつも、悩みながらも奮闘するアンタだったのにな…

5話マギの休日（後書き）

レポートに追いかけてる…プログラムが組みあがらない…そんな時！！タバコを吸いましょう（マテ

6話・それはただの友情だったり

ついに明日、一週間の研修も終わり、ティータが空へともどるとなった。

「ふむ、お別れ会でも開くかついでだし。」

「なんも用意していないはずだが？」

俺のつぶやきに、アルはツツコミを入れる。

「こんなこともあるうかと、つうか俺主体となって部隊メンバーでいろいろ裏工作しとったのよね。隊長からはアラート出撃するという条件で、許可もらってるし。」

「…マジかよ…」

クツクツク

「ああ、お前には明日ティータを誘導する役目をやるつ。」

「お前は？」

「ん〜退寮手続きがあるから、明日は忙しい。」

「は？」

俺は電子タバコをくわえる。

「ちよつと早めにいくことになりました、テヘペロ。」

「…はあ。」

遠い目をするアルを見つめる

「半年ぐらいで戻ってくるし、お前がいなくても日常生活…無理だな。」

「おい、そこは俺を安心させるために、日常生活できるっていつところだろ…!」

軽く遠くを見ながらわらう。

今日は、俺がパトロールにあたっているので、制服のまま街中をうろちよるする。

「ふむ、仕方ないとはいえ、今日のパトロールは俺だけっていうね

「？」

まあお別れ会もあるし、そこで暴れることができたなら御の字なんだけ。

「ママど〜」

ふむ、幼女が母親とはぐれてしまったか。

「お嬢ちゃん、お兄さんが一緒に探してあげよう。」

俺は女の子に手を差し出す。

「これで光源氏計画を出来るとか考えてないわよね？」

誰だ、俺の品性を疑われるようなことを言うのは。

まるで、俺が常にそんなことを考えているようなこと言いやがって。

「失礼な、俺は20代前半のおねーさまが好きであって、そんなこと2割も考えていない!!」

「8割は考えているのね？」

俺が振り向くと、そこにはミーシャがいた。

「やっぱりアンタか、ミーシャ」

「ええ、私もパトロールでね?で?その子どうしたの?」

「どっやら迷子らしい。」

俺は少女を肩車をすると、軽く笑う。

「警備隊の任務じゃ」

「それでもやるんだよ。」

ほら、犯罪を未然に防ぐのも、管理局員の仕事だろ?とおもっただけどね?

「さあ嬢ちゃん、自分がどっちの方向から歩いてきたかわかるかい?」

しばらく嬢ちゃんの歩いてきた道で、女の子を探している女性はいないかと、聞いたらすぐみつかった。

「ありがとうございます。」

御嬢さんの母親が頭を下げる。

「気にしないでください、これも僕らの仕事ですから。」

俺はそれだけ言つと、その場から離れる…

「お疲れ様。」

缶コーヒーが投げられ、俺はそれをキャッチする。

「なんだ、ついて来てたのか。」

「…ねえ、今日見た貴方と、いつもの貴方…どっちが本物なの？」

俺は微笑む。

「どっちも…いや、どれも俺さ。理想に忠実に、自分に素直に生きる。それが、マジなんだよ。」

「…」

彼女は何も言わない。

俺は缶コーヒーを開けると、軽く喉を濡らす。

「さて、せっかくだし一緒にパトロールするか。」

「へ？いつもアルさんと一緒か、一人で回っているんじゃない？」

自然に浮かんできたのは苦笑。

「ん〜、たまたまだろ？パトロール任務にアルが付いていないときに、たまたま俺のことを疎ましく思ってる連中と当たってるだけさ。」

「

それは、貴方が空に上がるのとの関係が？」

俺は首を横に振る。

「数年後、大きな事件が起こると俺は予測している。それに対して対応できるだけの力や肩書をそろえておきたい。」

だから別名義での、少将という肩書を手に入れた。

「そのために、空に上がるの？」

「ああ、決して108部隊が嫌になつたとかそういうわけじゃない。あそこには俺好みな、オペレーターもいるしな？」

軽く冗談を放つ。

「目の前に、もう一人いるじゃない。」

何かボソつと喋っているが、聞き流しておく。

「はは、まあ終わったらまた帰ってくるよ。そうだ。」

俺は待機状態がカードの銃のストレージデバイスを取り出す。

「こいつを持つといってくれないか？」

「…え？」

俺は軽く微笑む。

「俺が帰ってきたら返してくれ。」

「なんで？これはマジの戦術に必要な…」

戦術かぁ。

「ああそうだ、アルにでもなくミーシャ、君に預けるんだ。あれだけ？俺は結構お前のこと、信頼しているんだからな？」

「へ？」

軽く息を吸う。

「はは、行くぞ？」

俺たち二人の初めてのパトロール任務が始まる。

「ん？」

俺はふと違和感を感じ、空を見上げる。

「どうした？アル。」

ティーダがそれに気付いたのか、俺に並走してくる。

「いや、どつかで人が訓練しているときに、ラブコメしてる輩がいそいでなあ。」

「…確か今日のパトロールは…マジとミーシャさんだったはずだけど…」

ティーダが覚えているんだったら、そうなんだろうなあ。

「くつくつく、帰ってきたらしめるか。」

「あの？アルさん？お顔が怖いですよ？」

ティーダが若干引き気味に、そういう。

「あはは、ティーダさんこの顔は生まれつきdeathよ？」
早く帰ってこないかなあゝあいつ…血祭りにあげてやんよ。

「んゝ本日も異常なしと」

「アレからまさか、挨拶してくるおばあさんとかの話につきあった

り、荷物運び手伝ったりしてただけじゃない。「痛いところをつかれたなあ。」

「はは、あれでも結構重要な意味を持つんだよ?」

「まさか、いつもあんなことを?」

俺はうなずく。

「ん、まあな。ほら顔を覚えてもらえば聞き込みが楽になる。不祥事とかあるし管理局を信頼しない人もいるからね?」

そんな人たちから情報を引き出すには、個人レベルでこいつならと思わせることが重要だったりする。

「捜査官とか査察官の仕事が似合いそうね?」

「はは、4年前にも同じこと言われたよ。」

くつくつと笑う。

ふと、駐屯地が見えてきて、少し冷や汗を流す。

そこにいたのが、鬼のような形相をしたアルとそれを押さえるように立っているティードだからだ。

ティードが俺に気づいたのか、目で逃げると合図を送ってくる。

「んじゃ俺はここら辺で…あ。」

俺が後ろを向いて逃げようとする、先ほどまで駐屯地の門にいたはずのアルが立っていた。

「あははーアルさん、なにをそんなに怒っているのですか?」

「ん? いやまあ、なんだ。くたばれこのリア充め!」

俺は一撃目を避けると、二撃目を受ける体制をとる。

「正攻法で当たらないのなら、こつだ。」

10個の誘導弾が俺を狙い、軽くため息を吐く。

よもや、怒りだけで制御しきるとかどこのバグキャラだよ。

「まったく、俺を倒すには、まだ足りんなあ。出直して来い。」

俺はティードをつかむと、奥へと入っていく。

「ちょまてマギ…何するつもりだ。」

俺はマイクをむしり取ると、スイッチを入れる。

「108部隊全員出てこいやこらあ〜。」

隊員たちが集まっていく気配を感じ、俺はにやりと笑う。

「行くぜ。」

隊員たちが集まったところに入ると、一斉にクラッカーがなる。

俺は投げられたダイナミックマイクを片手に壇上まで飛ぶと叫ぶ。

「研修期間お疲れ様、ティーダ！！そして、俺を空へ見送る会はじめるぜえ。」

そして、宴が始まる…

第7話：そして彼は空へ上った

空へ上がる次元航行艦の内部にて。

「いやまさか、マギまで空に上がるなんてな？」

ティードが俺にそう話しかけてくる。

「ん？驚くようなことじゃない…空戦Aにとって執務官にとってデバイスマスターとるだけの簡単な作業するために、半年空へ上るだけだから。」

「いやいや、執務官と空戦Aは解るんだが、デバイスマスターは全く別の資格じゃないか。」

ふむ…

「ティード。できないと思うのか？この俺に？」

軽く笑う。

「何を焦っているんだ？マギ。」

確かにあせっているようにも見える。

「知っているか？この世界って結構、不安定なんだぜ？」

おっとついたようだ。

人を搬送するための次元航行艦はやっぱ早いなあ。

「んじゃ、ティード。俺はここでお別れだ。」

俺はティードに別れを告げると、指定された場所へ向かって歩いてゆく。

ふと立ち止まると、そこには管理局の三人娘の一人、フェイト・

T・ハラオウンがいた。

「ふむ…回り道をしていくか。」

軽く回れ右をする。

「どこに行くんや？」

この間聞いた覚えのある声が聞こえ、俺はだらりと冷や汗をたらす。

「アンタのこと調べさしてもらたで？マギ二等尉。」

「八神：はやてか？それに：クロノ・ハラウン執務官までいるじゃないですか。」

俺は振り向くと見えた黒い髪の青年を見る。

「大方、俺のことを調べたのは執務官さんですか？」

「まずいな：こいつらのバックには情報整理に関しては最高の男がいる。」

無限書庫には俺の素性ものっているはずだ。

まあクロノを見る限り、十中八九正解だろうな。

「：で？どこまで知っている？」

「君が：4年ぶりに管理局に帰ってきたということだ。少将がなくなられたあとに、マギと名乗る人間が戻ってくる。少々おかしくはないか？」

……ふむ。

「少将：マギ少将のことですよ？あれはたしか特Aランクの秘匿文章だったはずだが？」

「：なんでそれを知っているんだ！！」

俺は苦笑いを浮かべる。

「知っていたら悪いのか？まあ、ガジェットドローン：AMFを積んでいる自動兵器を調べていくうちにあたっただけだからな。」

もういいか？と言いつつ俺は歩き出す。

まったくなんなんだあいつらは…

訓練ルームに入ると、空戦Aランクを受けるために、今まで使わなかったデバイスを展開する。

「ふむ…」

グローブ型のそれは、指にぴったりフィットし、過去に残っている感覚とあまり違いがないように思う。

「サーチ…」

展開されるのは無数の魔力弾。

「その内で人を護り外では敵を殲滅せん存在にならん！！」

術式暴虐要塞：オリジナル術式でグローブ型のストレージデバイスに記録されている最強技だ。

数千：数万近くの魔力弾が俺の周りを漂う。

「ん」

俺の魔力構築式が変わったせいか、魔法の出力にノイズがはしっているなあ。修正しとかないと。

俺は通常魔法にプリセットされている術式を展開していく。

かつて使っていた時よりかは俺の魔力構築能力が格段に上がっているんで、やはりこちらでも修正を加えないといけなかった。

ぱちぱちと、拍手が聞こえる。

「構築能力が上がりすぎて、デバイス内部の処理が追い付いていないのね。それにしてもすごい魔法の練度ですね？」

彼女はゆっくりと、こちらに歩いてくる。

「君は？」

「失礼しました。私はデバイスマスター、エーネ・イツキです。」
名前からして、管理外世界の血を引いているな？

「マギさんですよね？」

「利用履歴調べたのか？」

「ええ、陸から上がってきた人が専用デバイスを使っていると聞いたので。」

基本的に、大量生産の量産型デバイスがおおい。

特殊魔法や、固有技能がない限りワンオフのデバイスを作る意味がないからだ。

「貴方、そのデバイスを自分で調整するつもり？」

「そのつもりだが？ほかのデバイスマスターに渡すと、俺用の調整ができないからな？」

「貴方は自分の中で、魔力構築をした後デバイスに入力して出力する効率よく出力する方法で魔法を使っているでしょ？」

そこまで見抜くか。

「はは、君が俺の部隊に来てくれたら俺がマスターの資格を取ら

なくて済むのに。」

「あはは、今回の調整は私が引き受けるわ。さっきの魔法を見せてくれたお礼ね？」

俺はちらりと、エーネを見る。

どうやら、純粹にそういつてくれているようだ。

「頼むよ。」

俺はデバイスを解除して、デバイスを彼女に渡す。

「…これ、もとはインテリジェントデバイスよね？ AIはどうしたの？」

…俺はため息を吐く。

「別のデバイスに移植したよ。あの AI だけに創ったデバイスにね？」

「そのデバイスはどこに？ 行方不明だ。とある上官と共に…」

俺は苦笑いを浮かべ、彼女を見る。

「え？…でもこれってまさか…」

僕は闇の書：いや夜天の魔導書の製作者を見て驚くこととなる。

そこに記されていたなは、マギという名だったからだ。

「クロノから聞いたマギ、なのはから聞いたマギ、そして歴史上に点在するマギという名の記録。」

なにか…何か重要な意味を持っている気がする。

「全てはつながっているん？」

「肯定、歴史上に存在するマギはすべて彼です。初めまして、貴方がユーノ・スクライアですね？」

いつの間にか、見知らぬ指輪を首から下げたはやてがいた

「ここから先は、悪魔の話です。聞く気がありますか？」

僕はこの後、死ぬほど後悔することになる。

まさか、あれだけの話だとは、思わなかったからだ。

8話・永遠の別れ…（前書き）

無理やりかんMAX!!

8話・永遠の別れ…

新暦69年予定調和のように、話が進み。

俺は今デバイス研究所で実地研修を受けていた。

「ふむふむ、なるほどねえ。」

なぜか研修というより、開発を行っているが。

「ここはA4で行われてる処理のコピーを迂回ようバイパスにつなげ…あゝエラー吐くな。済まないがもう少し待ってくれ、パツと見じゃどこでエラー吐いてるのかわからん。」

俺は端末をたたきながら、エラーが起きている個所を探す。

ふむふむ。

「さっきの迂回バイパスにつないで、そのバイパスに反転機能つけるそれで通るはずだ。」

「ねえ本当に研修いるの？」

俺はキーボードをたたきながらエーネを見る。

「いらんといえば、規則かえられるか？」

「かえれないけどさ。」

過去に造っていた回路を拡張処理をしている。

「だったらいな。研究は結構楽しいからな。」

回路を創るために、機会に書いた回路データを投げる。

「ふう。」

中のプログラムの構築に戻る。

ふと、音源だけのTVを聞いていると、気になるニュースが流れていた。

「108部隊の管轄内で犯罪者が逃げ回っている？主犯格の男は奪った銃型のデバイスを使用しているだ…」

いやな予感がし、俺は白衣を脱ぐと、陸士隊の制服を着る。

「どこに行くの？」

エーネの言葉に、俺は答えず本部へと通信を行った。

「陸士108部隊直通転移したいのだが、略式転移魔法行使許可をもらいたい。」

『解りました、現在転移許可を上層部…』

俺は本部から、地上本部へと切り替える。

「よう、久しぶり。レジラス本部にお前権限で、転移許可を出してくれ。」

『マジ！！何をするつもりだ。』

「…犯罪者は捕まったのか？」

『今は立てこもり中だ…まさか貴様！！まあいい、やれるな？』

俺はうなずくと、端末に届いた転移許可の書類を流し読みし、にやりと笑う。

「了解！！」

108部隊についた俺は、隊長から人質の名前を聞き、どす黒い怒りをたぎらせていた。

「アル…で？対策は？」

「何も無い。」

…俺はため息をつく、先日試験をパスして手に入れた特権を使わせてもらうことにする。

「執務官マジの名において、108部隊はここで待機。俺はあそこに飛び込む」

「なっ！！お前…人質が…」

表情筋をピクリとも動かさずに言い放つ。

「解っているとも、だが我々が優先すべきは平和。たかだか100名ぐらいの命でそれがかえるものなら。」

思いつきり殴り飛ばされる。

「クソ野郎が！！てめえ空に行つてかわ…」

「変わったからなんだ？これは執務官命令だ。」

沈黙が流れる。

「アル、できることなら俺も変わりたくなかったよ。」

まさか自分の口からそういうことが、スラスラ出るなんてなあ。

「今追っているのは、ティードと人質になっているのは…ここにいないあいつだな？」

「…」
俺は目を細める。

「二人を助けるついでに、百人ぐらい軽く助けに行つてやりますとも。ええ。」

強引に元の俺に戻す。

「まあ泥船に乗った気で待っている。」

犯人が立てこもっている排気ダクトから潜入し、上へと昇つていく。

「ふむ…サーチ術式か…大方コアに反応して敵を見つかる。サーチがかかっているのはダクトだけか…」

ふむ…ああ銃型デバイスがないのが痛い。

「あれにはシヨットバリエーションと呼んでもいい機能があったからなあ。」

あれの機能に気づいていない時点で、まだまだか。

「セットアップ」

黒衣のバリアジャケットが半透明に透ける。

このバリアジャケットの能力、ダメージ減衰を0にすることで、使用者の体をすべて知覚できなくするというものだ。

それがたとえ、機械であろうが…

「ふう…マギである俺が何故こんなにも突き動かされているのだからうね？」

ただ一つの感情に、マギが突き動かされるのは珍しい。

俺も毒されたってことかあいつらに。

「はあ、人は所詮どこまで行つても人が…」

犯人がいるであろう場所に突入すると、そこには意外な人がいた。

「ティード…ランスター？」

犯人と対峙している男は、ティードだった。

彼がああ、の包囲網を抜けるなんて、思いもしていなかったのだ。

「あぶねえ」

俺はすべてを理解して駆け出すものの、魔法弾は犯人の手から放たれティードを貫く。

「…馬鹿野郎。」

『歩行要塞』

俺の周りに無数の魔力弾が浮かび上がる。

『マルチロツク開始』

「同調：クリア。シュート」

一瞬にして、立てこもり犯の死体の山ができる。

『地上本部聞こえるか？立てこもり犯を激闘の末倒した…』

俺はゆっくりと奥に入っていく。

そこには、虫の息のミーシャが横たわっていた。

『要救命者2名…早くしてくれ。』

俺はまず、ティードのほうに駆け寄る。

「よう…ひさしぶ…り」

「ああ、久しぶりだな？ティード。」

俺は彼の手を握ると、そばに座る。

「ああだめだ…意識が遠のく。なあ…最後にいいか？」

「…諦めんなよ。」

目から涙がこぼれ始める。

「はは…俺にはティアナっていう妹がいるんだ。胸ポケットに写真が…」

彼の胸ポケットから、最近のものであろう写真を取り出す。

両親がいないことは聞いたが…

「ティアナのサポートをやってくれないか？俺の代わりに…あと…伝言を…俺の背中を追いかけるなど…」

…

「ああ、わかったよ…」

そういうと、彼は安らかに眠っていった。

「畜生…キュア開始」

虫の息で横たわっている彼女に手を差し伸べ、ぎりぎりまで延命処置をする。

「せめて…病院の治療を受ければ回復する可能性があるんだ。」
その数分後救助隊がやってきた。

アレから数時間が立った。

俺はどうしているのかというと、いつ死ぬかわからない彼女のベッドの横にイスを持ってきて座っている。

「なあ、聞こえてないかもしれないけど、聞いてくれよ。」
手を握り、そうつぶやく。

「こいつはとあるバカの話なんだが…こいつはさ、地位を求めるあまり、好きな人から離れて本局行ったらしい。そいつがかえってきたときには、好きな人は危篤だったらしいんだ。」

軽く彼女の手に力がこもった気がした。

「しかも、こいつには他にもかけがえのない友人がいたらしい。そいつも、彼が帰ってきたときに、目の前で殺されたそうだ。はは、最初からそいつがいれば、誰も死ななくて済んだのにな…」

俺は力なく笑う。

「しつてたかい？俺はお前のことが好きだったんだぜ？」

奇跡か、ただの神の気まぐれかわからないが、ミーシャの目が開いた。

「しつて…たよ？知ってた？私もマギのこと…が…」

ゆっくり閉じていく彼女の瞳を見ながら、涙をこらえる。

「ああ知ってたよ？」

機械からけたたましい音が鳴り、俺は彼女の死をいやでも実感させられる。

ナースコールを握り、俺はその場で泣き崩れることしかできなくなっていた……

8話・永遠の別れ…（後書き）

死を乗り越えられるのか？人としてマギは成長するのだろうか？等はすべて俺のノリと勢いにかかっています。

「マギ…それはお兄ちゃんがよく手紙で書いていた名前だ…」

「まさか…アルさんですか？」

「ん…君はティードの妹か？ふむ自己紹介は省略させてもらうよ？フルネームを知っているみたいだしね？」

その人はそうつぶやくと、軽く微笑んだ。

「ふん、まさか陸士部隊のゴミの手助けあっても、任務を遂行できない屑なんてな！！」

不意に、そんな声が聞こえてくる。

私はそれを聞いた瞬間、呆然としたようになった。

音の前のアルさんは拳を握りしめ、それを言い放った人間の下へと歩いていく。

「は？」

そんなアルさんの声が聞こえたのは、こっちに豚のような管理局の上の人間が飛んできたからだ。

「ミーシャがゴミだと？ティードが屑だと？ふざけんじゃねえぞ。現場を知らないウジどもが！！」

怒気を含んだ声でしたので、そちらを見ると、真っ黒な目と髪をしてメガネをかけている見知らぬ男の人がいた。

「マギ！！お前！！」

え？あの人がマギって人？

「俺のいねえ間に、空の連中はここまで腐ってたのか？まあもともと腐っていたがな！！」

へ？

私でも知っている。

お兄ちゃんがいつも自慢してた、大佐が真っ黒なマギの隣に立っていた。

「くつくつく。」

俺は、俺と共に殴り飛ばしたウジを見下げていた。

「マギ少将、どうかな？久しぶりにウジを見た感想は？」

「ゴミ、にしか思えん。まあ今はお前がいないと現存できないから別段どうでもいい。」

ふん、俺らしいことだ。

「だがまあ、命はった奴をコケにするような連中は許せないがな！」

俺の分身はどこかに電話を掛けると、につこりと笑う。

「ああそのゴミ、もう明日から管理局来なくていいから。クビね？」

「は？」

俺は笑いをこらえながら少将を見る。

「俺の身内に喧嘩売ったんだ。それぐらいの覚悟を持ってもらおうか!!」

さすが、俺：性格悪いわあ。

「さて、少将はほっておいてと、君がティアナだね？俺はマギ、君のお兄さんの友人をやっていた。」

俺はティアナに向かって頭を下げる。

「すまない、君の兄を助けられなかった。」

ティアナは驚いたように俺の顔を見る。

「お兄ちゃんが侮辱されて、怒ってくれた人がなんで？」

そのなんでは、自分もつらいはずなのにと意味のなんだろう。

「…これは自己満足だ。ティードを助けられなかったマギという男のね？」

俺はそうつぶやく。

「それから、ティードからの伝言で自分の背を追わないでほしいだと、あいつらしいな。それから、何か困ったことあれば俺にいつてくれ、あいつとは家族のようなもんだしな。ちなみに身元引受人は俺だ。いつでも俺の下を訪れるといい。」

俺は、軽く立ち上がると手を振り歩き始める。

「マギ？どこに？」

アルが問いかけてきたので、俺は苦笑いを浮かべる。

「ミーシャの葬儀も今日だろ？」

「馬鹿野郎が…」

さびしそうにさて言ったマギさんを見送りながら、アルさんがそうつぶやいた。

「マギさんっていったい何故、お兄ちゃんの遺言を？」

「…ティードが死んだ事件、あの事件に立ち会っているんだ。」

え？お兄ちゃんの最後を…？

「俺、ティード、マギの異色の三人組、まあティードだけは期間限定だったけどな。」

そういうアルさんの顔は、どこかさびしそうに思えた。

「俺ら三人は家族だって、笑いあってばかばかしく過ごしたなあ。

ティアナだっけ？君はあいつを頼るといいよ。」

なんで？と聞く前に、アルさんはゆっくりと口を開く。

「あいつさびしがり屋だからさ、頼ってやると喜ぶよあいつも。は…俺もまいつてるのかな？家族と同時に、本当の家族になれそうな愛しい人も同時に失ったからな…あいつは」

「え？」

まさか、さつき言ってたミーシャって人の葬儀は…

「そうだ、ティアナ。ティードはね？君のことを頼むとマギに言うていたんだ。」

私は、マギさんの歩いて行った方を見る。

「不器用ですね？」

「はは、だな。」

9話・別れの儀式（後書き）

大体14話から本編に入っていきます

10話：それは、彼女の生きる道を決める

アレから俺は、デバイスマイスターの資格を取ると、一線を退きデバイス開発研究員となった。

ちなみに俺は管理局から除隊し、管理局の傘下に入っている研究所に入った。

ティアナを正式に引き取り世話をするつもりが、なぜか俺が今は世話されているほうになっている。

「ちよつとマギさん？今日は学会でしょ？」

俺は優雅にパンをかじりながら、すすけた白衣を羽織っていた。

「ああそうだった。ありがとう、ティアナ。すっかり忘れてた。」

俺は新しい白衣をタンスから取り出し羽織る。

「マギさん、私来年、訓練校に行こうと思うんだけど。」

…そうか、夢だもんな…

あいつがいなくなる前から、魔導師として訓練しているのは知っていたが。

「お前が考えた結果だったらそれを尊重しよう」

仕方ないなあ。

軽く苦笑いを浮かべると、一枚のカードを渡す。

「これは？」

「3年前に、俺がティータのために作っていたデバイスだ。デバイスマイスターの資格を取る前だったから、結局ティータには渡らなかつたけどな。」

彼女が展開すると、あいつ用に調整された銃型のデバイスが現れる。

「グリップの持ち具合が悪かつたら言ってくれ。明日になおす。」

軽く言いながら、今日必要な資料を持つ。

「…がんばれよ、ティアナ。お前の道はお前だけのだ。」

俺はそれだけ言つと、空港に向けて歩き出した。

「ふむ、これはどうしたものか？」

空港に着くと、そこはまるで地獄絵図だった。

いたるところから火が吹き荒れ、ひどい状況になっていた。

「まだ奥に救助者がいるだと。」

警備隊の連中だろうか？そいつらの声が聞こえる。

「…っち」

俺は引退したんだ、関係ないはずなのに…

「セットアップ」

なんでデバイスを展開してんだ？

「リミッター 限定解除」

なんで空を飛んでんだ？

なんでこんなにも焦っているんだ？

俺はかける、炎の中を。

炎の中に沈んで、死んでいく命の光を見る。

「くっそ、マジかよ。」

そう毒を吐くと、崩れていく空港内を高速で飛んでいく。

振ってくる瓦礫にぶつかっても、炎にあぶられても止まらない…

止まる気がない…止まってしまえば、救える命も救えなくなる。

また俺のせいで、人の命が失われるのはもう嫌だ。

救うだけの力があるのに、救えずただ見ているだけで殺してしま

うのだけは…

ああそうか、俺はただ…ただ誰かを救いたいためにこんなことを

しているのか…

俺の直線状にいた少女の上に瓦礫が落ちようとしていた。

「間に合う！！吹き飛ばせ！！」

俺は銃型のデバイスを素早く展開し、瓦礫を吹き飛ばす。

「大丈夫か？嬢ちゃん？」

俺は少女を保護すると、災害用に組まれてあるであろうH.Q.に念

話で連絡を取る。

「H Q、H Qこちら元管理局員、避難所を教えてくださいと助かるのだが？」

『こちらH Q、貴方の現在位置を確認しました。誘導します』
デバイスに送られてくる情報を感じてとらえながら少女を抱え飛び立つ。

「嬢ちゃんの名はスバルだね？」

「へ？」

嬢ちゃんが驚いたような顔をする。

「はは、俺はゲンヤ…君のお父さんの知り合いなんだ。それで、君のことを少しばかり、彼から聞いて知っているわけさ。」

H Qに降り立ち、現地の職員に少女を預けると俺はゆっくりと指揮系統をつかさどっている場所に入る。

「な！！マギ」

驚くゲンヤをよそに、俺は椅子に座る。

「おいそこのちっこいの、避難率はどうなってる？」

「は…八割方完了してるです。あと3分で、現地の魔導師の方が到着するです。」

おいおい、なんだ？こいつら全員ボランティアかよ。

俺は舌打ちしながら、インカムをつける。

「こちらH Q、奥の北側を高速スキャンしろ多分まだ3人取り残されているはずだ！！建物がもう持たない。後それから、南方に6人少し外れた位置に一人の少女がいる。鎮火が間に合わない？火の回りを押さえるだけでいい。人命優先だ。どうせここまでできちまったら、空港を破棄するしかねえ。」

俺はカタカタとキーボードを打ち込む。

「学会の方への言い訳終了つと、ちっこいのさっきの10人で最後だ。確認したら全員鎮火活動に回せ。」

「でも、あと23人足りませんう。」

…足りないか…

「心配すんな、その23人は全員死んでるよ。」

「なんでそんなことが。確認したからな。」

あの二人の死以降、人の死に感情移入ができなくなった気がするが、気のせいだと思っておきたい。

「そんな…」

俺はポケットから煙草を取り出すと、本部から出る。

すると、ゲンヤが追いかけてきた。

「久しぶりだな。マギ。」

「ああ…」

気まずい沈黙が流れる。

「何も聞かねえのか？ゲンヤ。」

最初に口を開いたのは俺だった。

「アルから聞いたからな。」

そうかと、紫煙を漂わせる。

「スバル大きくなつたな？」

「あつたのか？」

俺はうなずく。

「ああ、保護したの俺だしな。」

灰がゆつくりと下へと落ちていく。

ゲンヤはどこか、目を閉じてうれしそうに笑っている。

「何がおかしいんだよ。」

「管理局をやめても、マギはマギだなんてね？」

そういえば俺の偽名をすべて知っていたな。

「はは、俺は行くわ。」

歩き出すと、ゲンヤは俺とは反対方向本部に入っていく。

それは戻るべき場所に、俺らが戻っていくだけの簡単な話だった。

「え？」

通信で聞こえてきたのは、管理局をやめたと聞かされていたマギの声だった。

「なんで彼がここにいるん？」

まあええ、うちはやることをやるだけや!!

「退避完了しました!!」

うちの戦いはここから、いまはここを何とかするだけや!!

11話：密会

交渉という名のテーブルに着けば、みんな同じ人だ。

俺は今、聖王教会に呼ばれていた。

「やあ、初めまして。カリム・グラシア？」

「ようこそいらっしやいました。英知の王、マギ。」

その呼び名を知っているか：流星は聖王教会だ。

「今回お呼びしたのは、他でもありません。新たに新設される予定の機動6課に教会からの派遣としていつてもらえませんか？」

機動6課か…

「そこに俺を配置をしてどうするつもりだ？」

俺は軽く腕を組み深く腰掛ける。

すると、俺の目の前に回線ウィンドウが開き映っていた3人の人間に目を見開く。

「これはこれは、3提督じゃないですか。3提督の出張る事件がこれから起きるとにらんでいいということですか？」

「ええ、ちなみに彼女らは機動6課の後見人でもあります。」

あゝやべえ、頭いてえ。

絶対厄介ごとに巻き込まれるじゃねえか。

「カリム女史、貴女はたしかレアスキル預言者の著書をお持ちですね？」

カリムの顔が若干ひきつる。

「ああ、一介の元管理局員が知っている理由は俺が英知の王だからでいいだろう。3提督まで動かすぐらいの予言を見せてくれ。」

差し出されたのは一枚の紙。

「古い結晶と無限の欲望が交わる地死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ちそれを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる。さすれど全ての英知を司る王目覚め、すべてを覆さん。か…」

それで、マギという名の英知の王を引っ張り出したいわけか。

「…俺に聖王教会所属騎士という称号をくれるんだったらいいだろう。」

管理局に戻るとしたら、聖王教会からの出向か、管理局に入るかだ。

管理局に入ると、俺の魔力量で部隊の制限天元突破しそうだから、聖王教会出向という形にしたい。

「話しを受けてくれるのでしたら。」

それなら…

「それならば、その話喜んでお受けしましょう。」

俺は出された紅茶に口をつける。

「君は、はなっからこころ辺を落としどころと、考えていただろ？」

「ヴェロツサ・アコース捜査官か？たしかカリム女史の義弟だったな。」

いきなり現れたヴェロツサは少し驚いたような表情を浮かべる。

「君は一体なんなんだ？情報を引き出そうとしても、教会か管理局が認識していない間の経歴が一切つかめないなんて。」

捜査官でもやっぱり俺はとらえられなかったか。

「さあな？」

俺はそう含み笑いをしながら言うのであった。

マギが聖王教会へ行った翌日の管理局内で、たぬきみたいな女性と、指輪が歩いていて。

私のはやての胸からブラさりながら、ゆっくりとあたりを見渡す。

『困惑…』

そこに、ありえない人を発見し、思わず声を上げてしまう。

…管理局をやめてから、行方がつかめなかったマスターが生きていたなんて…

「どないしたん？」

はやてが私をつまみ上げる。

『報告、マスターが通り過ぎた気がしました。』

はやては、少し難しい顔をする。

『困惑、なぜいまになって?』

「パートナーであるアンタがわからんのやったら、うちがわかるわけないやろ。」

私も、身の振り方を考えないと…

「なあアンタ、うちに隠していることはないか?」

『心外、マスターと違って隠し事はしてません。』

本当に心外である。

「彼の心に、何があつたんか確かめないといけないなあ。」

『困惑、あの人は…』

ちなみに私とはやては、機動6課新設のための手続きをしに、地上本部へと出てきている。

そんな場所に、私のマスターがいるとは思えないのだけど…

「今のみまちがいやないよね?」

『沈黙』

まちがいだとしてもやはりあの時、目の前をマスターが通って行ったのを見た気がした。

管理局のレジアスの下へ呼び出された、もとい自分から出向した。

「…」

入ってからしばらくずっと無言なので、めっちゃいづらい。

「…さて、レジアス俺を呼んだ理由を聞こうか。」

「君に来年新設される、機動六課にスパイとしていつてもらいたい。」

「俺はその言葉に目を開き、鼻で笑う。」

「はっ、管理局にもどれだど?笑わせてくれる…今の俺は騎士だ!」

「!」

剣型のデバイスを展開する。

「…知っている。お前がカリム・グラシアに呼び出されたというこ

とを。」

…そのうえで…か。

「わかった、だが話を受ける前に一つ、俺は現時点でダブルクロスだ。最後に有利そうな方につかせてもらおうが…いいな？」

「ああ…それでいい。」

俺はソファ―に腰掛ける。

「お前まで変わらないでくれよ？やり抜くと決めたらやり抜いてくれよ？」

「それは、自分の経験から言っているのか？」

「どうだろうと苦笑いを浮かべる。」

「馬鹿みたいに前向きじゃなくても、情熱的じゃなくとも俺は俺のままなんじゃないかな？」

「お前と話していると、懐かしい気分させられるよ。」

「そりやどーもと笑う。」

「スカリエッティには注意しろよ？」

それだけ言うと、俺はゆっくりとその場を後にする。

今日は、久しぶりにティアナがかえってくる日なんだ。

しかも友人を連れてね？

さあてと、家帰って飯つくってやるか。

12話：幕間というか、何というか

料理とはいささか興味深いもので、俺はその料理の材料を買いにスーパーに突入してゆく。

「あら、久しぶり。」

俺は目を閉じながらため息を吐き、ゆっくり片目を開ける。

「エーネか…デバイスマイスターの資格を取って以来だな。」
正直いやな再開だ。

「そうね…」

「どうして、こっちに？」

エーネは苦笑いを浮かべる。

「研究もひと段落ついたし、長期の休暇とって実家に帰ってきてるのよ。マジは今までどうしてたの？」

「親友の妹引き取って、デバイス研究所に詰めてた。管理局はやめたよ。今は一介の企業研究員さ。」

エーネは驚いたような顔をする。

「どうしてやめたの？貴方なら…」

「やめろ！！やめてくれ。」

俺は懇願するように言い放つ。

「俺なら上へと上り詰めることができる？俺なら…俺なら…友人や愛する人を救えなかった俺が？」

「いまだ心の中に残る二人の死がフラッシュバックする。」

「貴方…トラウマが…」

「悪い…取り乱した。」

俺は深呼吸すると、顔に笑顔を張り付ける。

「強迫性障害の一種だとは思いますが、何分医者には掛かっていないんでね？」

「…」

管理局を…自分にかかる責任を排除してやれば、俺はなおると確

信していたのだが…

「つうわけだ、わかってくれ。」

俺は苦笑いしながら、ターメリックを入れる。

「そうそう、地上に機動六課ってできるの知ってる？」

「ここでツツコミいれると、ばれそうだなあ。」

「管理局を離れてたからこそ最近の内情は知らんがどうした？」

「そこに私の弟子がかかわることになったから、デバイス関係で要求来たら貴方に回してもいい？」

ふむ、それぐらいなら。

「ああかまわんよ？ 聖王教会に出向しているときでなければ」

言ってるからしまったという気分になるが、まあいいだろう。

「どうして、聖王教会？」

「調査員向けのデバイスを開発販売する会社についてね？ ベルカ式デバイスを扱うことになったから、聖王教会と懇意にさせてもらっているのさ。」

「ああ、会社は特定できたわ。」

あはははと、苦笑いする

「したところでなんだけどね？ じゃあ、手のかかる妹分が返ってくるからこの辺で。」

俺はエーネに別れを告げると、レジへと向かっていく。

さあてと、ティアナが連れてくる友人って誰だろうね？

「さて本日のレシピはカレーライスー！」

一人で虚空に向かい、指さしする。

「さて、作るか。」

むなしくなったので、まじめに作り始める。

「まずはスパイスを開けず、カレールーを…」

冗談です、スパイスから作りました。

「油、シナモン、マスタード、クミンだばー」

しばらくすると、マスタードがはじけてくる。

俺はそのタイミングで、フライパンのふたを閉め火を消す。

「ニツク、ニツク〜」

テンションがおかしくなってきたながら肉を取り出し、マスタードが落ち着いたのを確認しフライパンの中に〜

「そおい!!」

投入した。

「ふははは、スパイシーになれ〜」

火が通った肉を別の皿にうつし（この先さらに壊れるので、中略）カレーが完成したわけですよ。

詳しいレシピが知りたい方は私のHPまでってね？ある場所は教えないけどね。

「ふむこれを煮つめて…」

「ご飯が炊けたようだな。」

「ふ…：我ながらこの匂いは最高だ。」

そう思っていた時に、ドアを開ける気配がする。

「ただいま〜」

「おじゃまします。」

俺は火を止めると、ドアのほうに歩いていく。

「お帰り。いらっしやい、君がティアナの友達だね？かげ…」

顔を上げて、その姿を見て俺は止まってしまう。

そこにいたのは、クイントによく似た少女だったからだ。

「大きくなつたな、スバル・ナカジマ。」

俺はスバルの頭をなでる。

「マジさん知り合ってたの？」

ティアナが驚く、いやその前に学校でできた友達の名前をお兄さんに送る手紙で書いたときなさいよと思うのだが。

「ん、俺の管理局時代の上官の娘だスバルは。」

「え…」

「空港火災の時、助けってくれたんですね？」

「え？」

あーそういえば、火災の時は俺は管理局を引退してた時だったなあ。

「…ほら、巻き込まれた事件あったじゃん？言ってなかったけど、あれの時救助活動勝手に手伝ってたんだよ。」

結局、学会は後日になっちゃったからなあ」

「じゃあ、スバルのあこがれの人が、マギさんだったの？」

「面白い偶然だね？まさかティアナが言ってた人が、私の恩人だなんて。」

俺は微笑ましい気持ちになりながら、二人を見る。

「そうだ、スバル。ティアナは俺のことを何と？」

「えっとですね〜「スバル！！」」

ティアナがスバルを自室に引きずり込んでいく。

「すぐにご飯だぞ〜」

はーいと返事が来たので、俺は軽く微笑する。

「くつく、なあティーダ、ティアナもすっかり大きくなったとは思わないか？」

俺はご飯をよそい、温めなおしたカレーを注ぐ。

二人を呼び、食卓を囲む。

「これが、マギさん自慢のカレー？」

スバルが聞いてきたので、俺は苦笑いを浮かべる。

「ああ手軽に食べたいときなんか重宝するんだぜ？スパイスの組み合わせさえ覚えておけばいいし、味変えようと思えば、スパイスの分量から使うスパイスの種類を変えていけばいいし。」

俺は自分用に調合したガサムマサラをぶち込んだカレーを食べる。

「そういえば、Bランク昇格試験はどうだったんだい？」

「落ちちゃった。」

ティアナがそう落ち込む。

「でもでも、なのはさんが一週間の研修後特別に受けさせてくれるって。」

なのはか…まさかここでその名が出るとは思わなかったなあ。

「大方、機動六課への勧誘か？」

「しつてたの？」

ティアナがそう聞いてくる。

「高町教導官、フエイト執務官、ためきちの三人が、新しい部隊を立ち上げる話は聞いているからな。高町教導官が出張ってくるというのなら、勧誘系統だろうと思っただけさ。」

俺は水を飲む。

「マギさん、機動六課に行っても？」

「ん？なぜ俺にきく。お前の意志で決めろ、俺ができることはもうないよ。」

軽く突き放したように言う。

「だがまあ行くとしたら、よく見て技を盗め、思考を盗め、戦術を盗めかな？これからのアドバイスとしては。」

「どういう意味ですか？」

スバルが首をかしげる。

「学校では教わらなかっただろうけど、対人戦になった場合必要となるのは、技、相手の先に行く思考、的確な戦術だ。其れが一番効率のいい学習の仕方は、盗むことだな。」

ああ、自分ができなかったことを説教垂れているのか…

「まあそれをやりやすいのがエースと呼ばれてる三人についていく道だろうが。」

まあ実際俺も行くんですけどね？

「マギさんは、そこまで考えていてなぜ管理局を？」

「体調の問題かな？あと、俺はデバイス屋になったから、デバイス開発をしたときがあったんだ。」

ぶっちゃけ、前使ってたストレージデバイス三つをバージョンアップさせたかっただけなんだけど。

「んじゃ、俺は明日早いしねるわ。」

そついいながら、俺はゆっくりと自室に歩き出す。

「…ああ」マギ”の用意もしとかないといけないなあ…」

明日から大忙しである。

12話・幕間というか、何というか（後書き）

肉炒めるところまでは、大体2chのスレです。かの有名な？カレースレみて、おう、今晚の飯はカレーに使用と思い作って以来スパイスから作るカレーというのはまってしまったという思いでもあるので、勝手に使わせてもらいましたw
ちなみに、和食系の煮物はおいしいって言われますねよく。洋食系はまだ始業中ですけど（苦笑）

13話そして物語は始まりへとつながっていく。

俺は管理局陸士部隊の制服を着て、機動六課に来ている。

「遅いおつきやな。騎士、マギ。」

後ろから、関西弁のためきの声が聞こえる。

「俺が来るのは実際、全体オリエンテーションの時だったと思うのだが？」

「そやったっけ？」

クソこのためきとぼけやがって。

「よく出向してくる気になったわね？」

俺は目を細める。

「この隊には、友人に頼まれた妹分と元上官の娘が来るらしいからな。」

「知ってて入れたんやけどね？」

…こいつしばいてやるうか？

「それにプロジェクトFの残滓に、白銀の使役竜か…極めつけはあの魔導書のプログラム生命体に三提督の再来といわれた三人組か。睨まれるぞ？」

というか、もうすでにレジアスのおやつさんには睨まれてるが。

「わかっとる。すべてわかっただうえでの判断や。」

俺は静かに目を閉じる。

「久しぶりに使う名だが、マギ・アシユナルが力をかすことを約束しよう。」

「でもあなたがいる限り、アシユナル少将は表に出れないんじゃない？」
俺はにやりと笑う。

「俺はマギだ、不可能はない！！それより、俺のデバイス返して〜」
まったくしまらない男である。

管理局本部。

「マギ・アシユナルだ。」

俺は管理局に戻るために、着実に準備を開始していた。

「久しぶりだね？マギ君」

コルアネス中将、俺を大佐時代に引つ張ってくれた人が声をかけてくる。

「お久しぶりです、中将。」

俺は中将に敬礼をする。

「今まで何を？マギ君」

すべてを見通しているような目で見られ、苦笑いを浮かべるしかない。

「少し休暇をね？肉の壁になっても、瀕死の重傷を負わせるような攻撃喰らったんですよ。再起不能になるかと。」

「それもそうだったな。生きているのがおかしいほどの攻撃だ。」

俺はにやりと笑う。

中将は俺のマスターの秘密を知っている。

「中将、俺の執務室の準備等をお願いしてもよろしいですか？」

「ああ、かまわないよ。君の復局手続きもしておこう。」

味方ひとりゲットか…

「ではマギ少将、これからの活躍に期待してますよ？」

俺は中将と別れると、ため息をつく。

「相変わらずだな、あのおっさんも。」

そのまま、無限書庫に足を向ける。

「何かご用でしょうか？」

好青年といった言葉が似合いそうな、青年が下りてくる。

「君に用があつてきたんだ。ユーノ司書長」

「誰なんです？」

ユーノの顔が険しくなる。

「失礼、高町教導官から話を伺っているはずだが？彼女は俺のことを探し続けているみたいだが。」

俺は自分の茶色の髪をかきながら、苦笑いを浮かべる。

「…『魔法』マジー!!」

ユーノが睨んでくるので、苦笑いをするしかない。

「俺に怒るのはお門違いだ…俺は……」

「ティアナはいつからこもるんだ？」

俺は自室のティアナに声をかける。

「1週間後にオリエンテーションがあるから、その時からかな？」

俺は苦笑いを浮かべる。

「ふむふむ、それまでは非番かい？」

「明日から特別講習で本局に3日間……」

俺は苦笑いを浮かべる。

「ああ再試のためか……」

俺はニヤニヤと笑う。

「ティアナ」

「なによ。」

軽くふてくされた声が聞こえる。

「がんばれよ。俺は応援している。」

ティアナならそつなくこなすだろうなあ

「はい!!」

俺は自室に戻ると、そこにおかれているネックレスとカードそして腕輪を見る。

それぞれ、グローブ、銃、槍にも鎌にもなるミッド式ストレージデバイス。

次に見るのは、指につけている指輪だった。

「疑問、なんですかマスター？」

「嫌味かそののしゃべり方。」

俺はため息をつく。

「すみません、はやてを弄るので、遊んでたんです。」

…だれだよ、こんな性格につくったのは…先代か…

「束ねる者、ディファイテッド新デバイスの適合調整しといてくれ。」

「
「解りました。それをやっておきます。それにしても魔法の統括人
格はどこに？」

俺はにやりと笑う。

「俺の代理だ。」

そして話は、始まりへとつながっていく…

14話：機動六課

機動六課メンバーが集まる日：

「ティアナ、忘れ物ないな？」

俺はティアナに荷物を渡し、背中をたたく。

「胸を張って行け。才能がないとか言つてあきらめるな！！前をひたむきに進んでいけば、何とかなることばかりなんだから。」

俺はにやりと笑う。

「ああ、そっぴや…ティアナ、聖王教会から出向してくる騎士に、時間外練習頼むんだつたらたのため。疲れず一人でやるより効率的なことを教えてくれるから。」

ティアナがうなずくと、俺を見つめる。

「行つてきます。」

「行つてらっしゃい。」

俺は笑顔で見送ると、ゆっくりと歩いていく。

「マスター行きますか？」

俺は機動六課の制服に着替えると、ゆっくりと笑う。

「ああ、久しぶりだなあ陸士部隊に行くだなんて。」

「マスター…私がない間、何があつたんですか？」

…俺は苦笑いをする。

「何かあつたんよ、深く聞くな。」

バイクの鍵を取ると、ゆっくりとバイクにまたがる。

ちなみに制服の上から…ライダージャケットを羽織っている。

「行くぜ相棒！！」

鍵を回し、クラッチを引き、セルスイッチを押し軽くアクセルをふかす。

低い重低音が耳に届き、俺はにやりと笑う。

「デイフィ、シャッターを上げてくれ」

「50秒後に自動で閉まるように設定しました。」

俺は一速に入れると、アクセルをひねりクラッチをはなす。ゆっくりとした加速を感じると、一気にアクセルを開けた。

ブオンという急な加速の後、俺はクラッチを引き二速に…三速にとだんだんと上げていく。

「流石に早いですね。」

「ああ、俺が惚れ込んだだけあるだろ？」

ZZR1300、管轄外世界のものだがなぜか輸入できた。

GSX1300Rはこっちに持ってこれなかった。

というのも、管轄外世界からの輸入には監査官を通さないといけないのだが、監査官がスキの車種を許可しなかったのだ。

おかげさまで、漢KAWASAKIに乗らざるおえなくなった。

まったく、ありえない監査官だろ。

ぜってえ、あいつら趣味に生きてやがる。

「とりあえず、騎士マガ機動六課に出向しました。」

隊長陣3名を見ながら口を開く。

「よう来てくれたな。」

「元管理局員にして、地上のエース。」

俺はジト目ではやてをにらむ。

「それ以上言わないでくれ、俺は局員時代のことはあまり掘り返されたくないんだ。」

やさしく微むと、軽く疑問をなげかける。

「ところで俺はこの分隊に所属すれば？」

「スターズに所属して、フォワード人の特別顧問として、戦技教官であるのはちゃんの下で、教えてくれないかな。」

俺はうなずく。

「了解した。」

「それと同時並行で、新人フォワード陣のデバイス開発も協力してくれへんかな？」

…デバイス開発か…ティアナとスバル筆頭に癖の強そうな連中集

めてそうだな。

「あの…マギさんよろしくお願いします。」

高町が駆け寄ってきて、握手をする。

「よろしく。俺のことはマギでいい、フランクにやってくれ、出ないと俺の髪の毛がうすくなる。」

ははと、苦笑いを浮かべる。

「で？俺はどこに行けば？」

「こちらです。」

連れて行かれたのは、仮想戦闘設備だった。

「屋外投影型の訓練設備か…いつたいいくら入ってんだこの隊には。」

一年間だけの実験部隊にしちゃ、金の周りがよすぎる。

まあそこは騎士カリムもいるしと思うが、それ以上の力が、動いているのもうなずける。

「かかわりがあるとすれば、クロノ提督？少なくとも、大将連中に身内もいるか…三提督とかなると笑いしかこねえぞ？」

俺は聞こえないようにぼそりと漏らす。

「お待たせしました。」

キヤリーケースを持ってきた女性を見て、俺は目を見開く。

「失礼、君はデバイス屋か？」

俺と同じ香りがプンプンする女性を見て、俺はため息を吐く。

「はい」

確か、アレの弟子がここにいると言っていたな。

「君がエーネが言っていたデバイスマスターで間違いはないかい？」

彼女はうなづく。

「先生の名前をどこで？」

「俺もデバイスマスターでね？ああ俺は騎士マギ、気楽にマギって呼んでくれ。」

「シャリオ・フィニーノです。みなさんからは、シャリーって呼

ばれています。」

軽く握手を交わしたところで、新人たちが走ってくる。

「遅くなりました。」

俺のことに気づかなかったのか、ティアナは敬礼をする。

「遅いぞティアナ・ランスター二等陸士!!!」

俺はニヤニヤしながら、叱咤する。

「マギさん!!!」

最初に気づいたのはスバルだった。

「やあ久しぶりスバルちゃん。マギって呼んでくれよ?ティアナは何回言っても抜けれないから、諦めた。」

ティアナはジト目で俺を見てくる。

そして、なのはがそれを中断して、シャーリーの話になる。

「通信管制官と、皆さんのデバイスのメンテナンス等を担当します。デバイス関連で相談とかがあつたら、いつでも来てくださいね?」

シャーリーの自己紹介が終わり、なのはが俺を見る。

「俺は聖王教会所属騎士、マギだ。気楽にマギと呼んでくれ、管理局的には執務官、デバイスマイスター等の資格を持っている。魔導師ランクは空戦Aランクというところかな?全員分の名前は一応目を通してある。」

俺は苦笑いをしながら、自己紹介をした。

ちみっこ組の男がエリオ、女がキャロだったな。

うん間違いはない。

「まあ俺に対する文句は後で聞くから、今はなのはの訓練受けてこいヒヨッコ共!!!」

「はい」

俺は少し離れたところで、煙草に火をつける。

もちろん携帯灰皿を持ってきているので、問題はない!!

「ふむ、あれがここ数年で話題になっているガジェットドローンというやつか。」

訓練の敵は、アンチマギリンクフィールド…通称AMFを搭載し

た機械だ。

「ス力さんは本気で何考えているかわからないからなあ。」

俺はそうつぶやくと、新人の動きを観察する。

「おやおや、かわいらしい御嬢さんが二人、あのフィールドを見て
いるなあ。」

「そう、それにはちょっと厄介な特徴が…」

解説を聞きながら、俺は目を細める。

「搜索指定ロストログア…」

俺は軽く目を細める。

レリックの説明が始まり、軽く欠伸をする。

周りの無能どもは、驚きやため息を漏らしている。

「機動六課がその中心として動いていく、その形でいいかな？八
神君。」

俺はそうつぶやくと、八神はすこし驚きの混じった顔をする。

「ほかの隊の魔導師にも、この情報と対策方法を教えて回ったらど
うですか？空から無理やり会議に出席している私が言えたことじゃ
ないがな。」

「マジ少将、それは…」

はやてが戸惑ったような顔をする。

「違法研究に使われているであろう、レリックか…それがどこにあ
るかかわからない状態で、それを追っているのが多数の自立兵器とい
うことは、地方の分隊にもこの話しを通しておいた方がいいと思う
のだが？」

あたりがシーンと静かになる。

「…どうだろうか？諸君、機動六課に意味を与えるように、レリッ
ク事件の全権を彼女等に任せてみるのは？」

予想外のことだろう、だが真実を知る俺にとってはこれぐらいで
も生ぬるい…

「空からの圧力ですか？」

「いや、お願いもしくは提案だ。俺は珍しく陸と空の区別をつけない人間でね？君たちを同じ理念をもった人間だと信じている。空の方で、陸の戦力強化プランを見直してもいい。そのためなら俺は提督になるぞ。」

全員が驚いた顔をして、それならということ同意してくれた。

「つつことだ、八神君がんばってくれ。」

そういうと俺は会議室を後にする。

さあて、お膳立てはしたぞマスター

「AAランクのスキルなんだけどね。」

「AA!!」

シャーリーとなのはのやり取りが面白くて、くすりとする。

「ティアナにあれを教えたの、マジ？」

「いや、あいつは真面目だからな…まったくもつとスマートな方法があるだろうに…」

俺が教えた魔法の中には、もっとましな魔法があったはずなんだが、まあ操作が難しい多重弾核魔法ということで見逃そうか。

「これが終わったら、シュミレータ 俺にも使わしてくれないか？」
ということ、新人フォワード陣が肩で息している横で、俺は昔使っていたデバイスを起動する。

「なのはさんの杖みたいなデバイス…」

集音魔法で、スバルの声が聞こえる。

「はじめてくれ。」

いきなり、動き始めてドローンたちが襲いかかっていた。

魔法弾をゆつくりと確実な動作でよけながら、俺は確実にドローンをたたきつぶしていく。

「まずスバル!!」

拡声魔法で、スバルに聞こえるように話す。

「攻撃に魔法を乗せるんじゃない、加速を使い!!それがガジェットの装甲を抜くのが簡単になる。さて次にエリオ!!」

俺は鋭い突きを出す。

「俺は基本魔力刃を形成しているから、アームドデバイスは無知なんだが、お前の槍術はどこか、デバイスに頼りつきりなように思える。」

槍でもないのに、ガジェットを貫いたデバイスにみんなが目を丸くしている。

「だから、効率のいい槍のつき方を覚えておけ。次にキャロ。サポート詠唱が長い!!それ以外に俺がいえることはない!!」

フォワード陣がずっこえる様子が目に見えてわかる。

「それからティアナ。どうせなら物体加速覚えとけ、多重弾核魔法より物体加速魔法のほうが扱いやすい。」

そういいながら瓦礫を加速させ射出、残りを始末する。

「さて、何か質問は？」

転移魔法で、フォワード陣の目の前に飛びそう言い放つ。

「……無理!!」「……」

ですよね〜。

「いや、こういう戦い方もあるって意味で出してみた。」

まあなのはが足りない部分を補うだろうが…

「ところで、なんで、マギさんがここに？」

「ん〜、聖王教会からの派遣だ。派遣許可を出したのはここにかかわった提督と騎士カリムそして、レジアス中将だな。」

レジアスの名が出て、なのはは少し鈍い表情をする。

「そんな顔すんなって。」

俺はゆっくり歩きだす。

「どこに?」

なのはが俺を呼び止める。

「用事だな、空の少将に逢いに行ってくるよ。」

そう、あいつら二人を護るために…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7748x/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～魔法という名の男(仮)～

2011年12月16日00時50分発行